

# 2018年度自己点検評価報告書

FD・IR・自己点検委員会

委員長：白鳥成彦

副委員長：飯野幸江

委員：猪狩純子

## 概略

FD・IR・自己点検委員会では学生を第一に考えた教育の質を向上させることを目的に、大学に過去存在しているデータをIRデータとして収集し、収集したデータを用いてエビデンスを持ったFDを行い、エビデンスを持ったFD利用した形で自己点検に利用していくことを行う。2018年度は特に中退防止と就職率向上を目指して、初年次学生ケース会議、2年次学生ケース会議および就職ケース会議を複数回開催した。結果として2017年度の初年次退学率は6.0%であるのに対し、2018年度の初年次退学率は6.4%になり、去年とほぼ同水準であった。内訳としては経営経済学部は4.61%、ビジネス創造学部は11.58%である。2年次退学率に関しては、2017年度の10.4%から2018年度は9.6%になり、僅かではあるが改善が見られた。内訳は経営経済学部が8.24%、ビジネス創造学部が13.04%である。

## 2018年度の目標

中退防止、就職率の向上

## 中退防止施策：初年次学生ケース会議と2年次学生ケース会議の実施

### 日程

2018年4月18日(水)第1回ミニFD・IRワークショップ vol1  
2018年6月6日(水)第2回ミニFD・IRワークショップ vol2  
2018年7月4日(水)第3回ミニFD・IRワークショップ vol3  
2018年8月31日(金)SDフォーラムにて副委員長基調講演  
2018年9月12日(水)第4回ミニFD・IRワークショップ vol4  
2018年10月10日(水)第5回ミニFD・IRワークショップ vol5  
2018年12月5日(水)第6回ミニFD・IRワークショップ vol6  
2019年2月6日(水)第7回ミニFD・IRワークショップ vol7  
2019年3月13日(水)第8回ミニFD・IRワークショップ vol8

## 目的

2017年度は初年次中退率が4.4%(2017年度入学学生)、4年間中退率が19.4%(2014年度入学学生)になり、初年次中退率は一定程度下がったことが確認されたが、いまだ4年次中退率が20%弱と高い水準にあった。そこで、2018年度は引き続き初年次中退率を5%以下、4年間中退率を15%以下にすることを数値目標にし、教職員(初年次教員、カウンセラー、学生センター、アドミッションセンター等)で取り組むケース会議を定期的に行った。初年次ケース会議では入学前からのデータを取得し、注意学生を予めマークしておきケアをする方法で行った。また、2018年度は2年次ケースも同様に行い、初年次と同様にケアを行い、4年間中退率を削減することを目的に行った。

## 経営経済学部

### 初年次学生ケース会議

経営経済学部の初年次ケース会議は、支援が必要だと思われる学生を抽出し、それぞれの学生に合った支援策を検討することで、中退防止対策を組織的に支援することを目的として行われた。具体的な方法としては、欠席がちな学生および単位修得状況がよくない学生をあらかじめ抽出し、それらの学生について下記のスコアリングを行った。

C：注意が必要ではあるが、アドバイザーだけで対応可能な学生。

D：注意が必要で、かつアドバイザーだけでは対応不可能な学生。

Cスコアの学生に関しては、アドバイザーを中心に様子を見ていった。Dスコアの学生に関しては、カウンセラーや学生支援センター職員などの専門家と連携しながら支援に取り組んだ。

#### 1. 第1回初年次ケース会議(2018年4月18日)

新入生ガイダンスと「基礎ゼミナール」の出席状況、および入学前のアドミッションセンター職員のコメントから、入学後まもなくの支援が必要だと思われる学生5人を抽出し、当該学生に関する情報交換を通じて、当該学生の現状を共有した。

#### 2. 第2回初年次ケース会議(2018年6月6日)

「基礎ゼミナール」を3回以上欠席している学生15人を抽出し、これらの学生の状況について、学生支援センターから提供された主要科目の出欠状況も含めて情報共有を行った。15人のうち、7人はC、3人はDにスコアリングされた。Dスコアが付いた3人は学生支援センターに対応を依頼し、Cスコアの付いた7人について様子を見ていくこととなった。

#### 3. 第3回初年次ケース会議(2018年7月4日)

CまたはDにスコアリングされた学生および「基礎ゼミナール」を5回以上欠席している学生14人を抽出して、これらの学生の状況を共有した。これらの学生については何らかの対応が必要であることが確認され、アドバイザーが個々の学生の状況を見ながら、必要に応じて学生支援センターやカウンセラーと連携しながら対応していくこととなった。

#### 4. 第4回初年次ケース会議（2018年9月12日）

CまたはDにスコアリングされている学生および修得単位数が15単位以下の学生57人を抽出し、これらの学生の概況として以下のことを確認し共有した。

- ・15単位以下の学生の中に春学期にスコアリングされている学生が全員含まれており、1人を除いて10単位以下である。
- ・10単位以下の学生でスコアリングされていない学生、すなわちノーマークの学生は29人いる。そのうち0単位の学生は4人である。
- ・入学者に占める15単位以下の学生の割合は21.0%で、過去5年間で最も低い。
- ・15単位以下の学生の半数は卒業前に退学してしまうため、このままだと30人以上が卒業前に退学する見込である。

上記の状況を受けて、15単位以下の学生を優先に1年生全員に面談をすることが確認された。また、連絡先不明となっている学生が、とりわけ留学生に多いので、そのような学生にはアドバイザーから連絡先変更の手続きをするように指導をするようになった。

#### 5. 第5回初年次ケース会議（2018年10月10日）

CまたはDにスコアリングされた学生と、単位修得状況が芳しくない学生（10単位以下の学生）のその後の状況を共有した。これらに該当する学生は38人であった。

#### 6. 第6回初年次ケース会議（2018年12月5日）

スコアリングの見直しを行った。単位修得状況および出欠状況がよくないにもかかわらず、当該学生の状況が把握できないケースが散見され、情報共有方法への課題が浮かび上がった。

#### 7. 第7回初年次ケース会議（2019年2月6日）

注意を要する学生の1年間の状況を概観し、2年次アドバイザーへの引き継ぎを兼ねた情報共有を行った。

【注意を要する学生にみられる傾向】

- ・入学当初の出席状況は良好であるものの、その後、悪化する。
- ・春学期の単位修得状況が良くないと、秋学期に出席状況が改善されることはなく、むしろ悪化する傾向にある。
- ・これらの学生の約半数が専門ゼミナールへの申請をしていない。
- ・未申請の学生は、秋学期の全部または秋学期の後半をほとんど欠席しており、退学予備軍になりつつある。

これらの傾向を受けて、専門ゼミナール未申請の学生には、アドバイザーから改めて申請の指導をし、第1次申請や第2次申請で不合格となった学生にはフォローを行うことが確認された。また、注意を要する学生ではないが、不本意入学で退学意向のある学生がいることもあり、次年度は不本意入学が増えそうなことから、そうした学生への心配りも必要ではないかという意見が出た。

#### 8. 第8回初年次ケース会議（2019年3月13日）・総括

初年次ケース会議の総括として、1年生の単位修得状況と修得単位数が29単位以下の学生の状況について確認し共有した。

##### (1) 単位修得状況の概況

- ・単位の修得状況が過去5年間で最もよい。

- ・40単位以上の学生の比率は50%を超え、過去5年間で最も高い。
  - ・留年（3単位）以下の学生の比率は例年並みであるものの、29単位以下の学生の比率は過去5年間で最も低い。
- (2) 修得単位数が29単位以下の学生の状況 \*別紙資料1を参照。
- ・すでに退学・除籍となった学生を除く29単位以下の学生は54名であり、要注意学生にスコアリングされた学生は全員該当している。
  - ・これらの学生のうち、退学を表明しているのは3名である。
  - ・留年が確定した学生は7名である。また、専門ゼミナールを申請していない学生は7名であり、そのうち5名が9単位以下の学生である。これらの学生は退学予備軍となる可能性が高い。
  - ・専門ゼミナールを申請しているが、9単位未満の学生は4名であり、これらの学生は3年次への進級にあたって躓く恐れがある。また、秋学期の修得単位数が春学期よりも10単位以上減少している学生は5名おり、大学生活への意欲の低下が懸念される。これらの学生には入念なケアが必要とされる。
  - ・昨年度と比較すると、秋学期の修得単位数が春学期よりも10単位以上減少している学生は、13名から5名への半数以下となっている。逆に、秋学期の修得単位数が春学期よりも6単位以上増加した学生は、3名から6名へ倍増している。総じて昨年度よりも状況はよい。

## 2年次学生ケース会議

経営経済学部の2年次ケース会議では、留年による学習意欲の喪失から中退に至る学生を防止するために、主として単位修得状況に関する情報共有を行った。それに基づき3年次への進級を中心とした支援策を検討した。

### 1. 第1回2年次ケース会議(2018年4月18日)

修得単位数が29単位以下の学生47人を抽出し、これらの学生の1年次の状況および入学前のアドミッションセンター職員のコメントを共有した。47人のうち、コメントが何も記入されていなく、ノーマークであった学生は9人だけで、多くの学生は何らかの形で状況が把握できている状態であった。47人の学生は、このままのペースで単位修得を続けていくと、4年間で卒業できない可能性が高いので、今後の状況を注視していくことになった。

### 2. 第2回2年次ケース会議(2018年6月6日)

修得単位数29単位以下の学生46人について、学生支援センターから提供された主要科目の出欠状況も含めて情報共有を行った。46人のうち、17人がC、7人がD、1人が保留にスコアリングされた。それ以外の学生は21人は、単位修得状況はよくないものの、現時点では学業継続の意思があり、中退の可能性がないことが確認された。

### 3. 第3回2年次ケース会議(2018年7月4日)

スコアリングの見直しを行い、現時点でCまたはDにスコアリングされる学生の状況を共有した。スコアリングの見直しの結果、Cが16人、CまたはDが1人、Dが1人、保留が1人となった。この他に、修得単位数が20単位未満の学生は、春学期で留年が確定してしまう可能性があるため、学生の状況を把握し、必要があれば面談を行った指導をすることになった。これらの指導は、個々の学生の状況を見ながら、アドバイザーの裁量で対応していくことになるが、何もしないで、その結果、留年が確定してしまう事態だけは避けることが確認された。

#### 4. 第4回2年次学生ケース会議(2018年9月12日)

CまたはDにスコアリングされている学生および修得単位数が47単位以下の学生65人を抽出し、これらの学生の概況として以下のことを確認し共有した。

- ・ 47単位以下の学生の中に、春学期にスコアリングされている学生のほとんどが含まれている。
- ・ 32単位以下の学生でスコアリングされていない学生、すなわちノーマークの学生が14人いる。
- ・ 47単位以下の学生の割合は35.8%で、過去4年間で最も高い。
- ・ しかし、19単位以下の学生の割合は5.8%で、過去4年間で最も低い。
- ・ 20～32単位の日本人学生の割合が12.3%で、2015年度・2016年度の2倍以上となっており、この層への学生支援の必要性がうかがわれる
- ・ 47単位以下の学生の4割前後が卒業前に退学しており、32単位以下の学生の退学率は2014年度が78.3%、2015年度が53.1%である。2014年度の数値を当てはめた場合、このままだと25人(=32人×78.3%)が卒業前に退学する見込である。

上記の状況を受けて、抽出された学生については、学生の個々の状況に配慮しながら面談を行うことが確認された。

#### 5. 第5回2年次ケース会議(2018年10月10日)

CまたはDにスコアリングされた学生と、単位修得状況が芳しくない学生(32単位以下の学生)のその後の状況を共有した。これらに該当する学生は33人であった。

#### 6. 第6回2年次ケース会議(2018年12月5日)

スコアリングの見直しを行った。その結果、Cが11人、Dが8人、保留が1人となり、スコアリングされた学生数が10名程度減少した。今後は現時点で留年が確定している学生についてはアドバイザーからのフォローを、留年と進級のボーダーライン上にいる学生についてはアドバイザーからのアドバイスをしていくこととなった。

#### 7. 第7回2年次ケース会議(2019年2月6日)

注意を要する学生の1年間の状況を概観した。これらの学生の状況には個人差があり、これといった傾向は見受けられなかった。2年次生に関しては今後、留年が確定した学生へのフォローが大切なことが確認された。

#### 8. 第8回2年次ケース会議(2019年3月13日)・総括

2年次ケース会議の総括として、単位修得状況の概況と、注意を要する学生および留年学生の概況を確認し共有した。

##### (1) 単位修得状況の概況

- ・ 留年の割合は昨年度よりも4.3ポイント低下し、過去最低の2014年度の数値に匹敵する。この結果標準年限で卒業可能な学生の割合は、過去4年間で最も高くなった。
- ・ その一方で、80単位以上の学生の割合は低下傾向にあり、過去4年間で最低である。70～79単位の学生の割合は上昇傾向にあり、過去4年間で最高であるが、70単位以上の学生の割合は低下傾向にあり、過去4年間で最低である。これらのことから、このままの状況が続けば就職活動への影響が懸念される。

(2) 注意を要する学生および留年学生の概況

- ・ 要注意学生にスコアリングされた学生18名のうち、7名が3年次に進級できた。
- ・ 3年次に進級できた7名の秋学期の修得単位数は、9単位以下が1名で、それ以外の6名は14～22単位である。このことから3年次に進級できた学生は、秋学期に非常に頑張ったことがわかる。
- ・ 2年次に留年した学生は17名であり、そのうち7名は春学期終了時点で留年が確定している。
- ・ 2年次春学期終了時点における修得単位数は、3年次に進級できた7名は全員30単位以上であったのに対し、留年した学生は1名を除いて29単位以下である。このことから2年次春学期終了時点で30単位を修得しているか否かが、進級と留年の分かれ目となることがわかる。

## ビジネス創造学部

### 初年次学生ケース会議

ビジネス創造学部の初年次ケース会議では初年次担当の教員、カウンセラー、学生支援センターの職員、アドミッションセンターの職員で単位数が少ない学生や大学に来られない学生に対して行う教学施策の共有と実施を行った。目的としては中退しそうな学生の抽出と確認、当該学生の教学施策の担当者の決定と施策の共有とした。

具体的な行動としては在学生に対してAからDのマークを付け、どの担当者がどのようなケアをするのかを明確化し、共有をおこなった。マークのAとBは大学での生活が良好な学生であり、中退施策は必要なさそうな学生。Cはまだ教学担当者としてのアドバイザでのケアの施策で行ける学生、Dは学生支援センター、またはカウンセラー対応を含んだ施策が必要な学生とした。

#### 1. 第1回初年次ケース会議（2018年4月18日）

第1回のケース会議では、初年次教職員と共に去年の学生対応の問題点、去年の中退率の数値を議論しながら、今年の学生対応の方向性の議論を行った。

#### 2. 第2回初年次ケース会議（2018年6月6日）

第1回のケース会議の議論を基にし、基礎ゼミナールの欠席が半分以上を超えている学生を中心ににおいてC・D判定がついている学生(18人)について主に議論した。最初から出席できていない学生をC・Dとし、18人のピックアップを行った。C判定になった学生はアドバイザが、D判定となった学生に対してはカウンセラーと職員の対応でやっていくことを同意した。

#### 3. 第3回初年次ケース会議（2018年7月4日）

第2回のケース会議の進捗と共に、最初にC・D学生の学生対応の進捗がどうなのかをアドバイザから説明を受け、その対応を全教職員で確認した。また、前回にはB・Cだったが、D判定になった2人の学生に対しての対応を確認した。この段階でD対応の学生は基礎ゼミナールに来られていない学生が多く、アドバイザより職員・カウンセラー対応にするべきなことを確認した。

#### 4. 第4回初年次ケース会議（2018年9月12日）

第3回のケース会議の進捗に対して、春学期の授業結果を進捗として共有した。秋学期の最初までに2人の学生が中退になったこと、その理由を確認した。また、4人の学生が春学期から秋学期にかけて学校に出席できていない、該当の学生は春学期にしっかりとマークはされているがなかなか戻ってこないことを共有し、その対応は学生支援センター中心に行うことで確認した。現段階でC・D判定の学生は12人おり、その学生を中心に対応を行うことを確認した。

#### 5. 第5回初年次ケース会議（2018年10月10日）

第4回にチェックを入れた12人の学生に対して進捗を確認した。この時期にはじめてC・D段階になった2人の学生に対して、現状の対応を全体で共有した。

#### 6. 第6回初年次ケース会議（2018年12月5日）

第5回にチェックを入れた12人の学生に対して進捗を確認し、他7名の学生に対して対応を確認した。

#### 7. 第7回初年次ケース会議（2019年2月6日）

第6回にチェックを入れた19人の学生に対して、秋学期の授業結果を進捗として共有した。

#### 8. 第8回初年次ケース会議（2019年3月13日）

第7回にチェックを入れた5人の学生、そして他10人の学生に対して進捗を確認する。

#### 9. 総括

結果として実際に退学した学生が11人であり、その中でC・Dがついていた学生9人になっている。C・Dがついていた学生で実際に退学してしまった学生は春学期の段階で学校にまったく来られないか、または何かしらの学習不備の兆候がでていた学生になっている。これらの学生は教育的なケアをするより、カウンセラーと学生支援センター対応となっていた。

### 2年次学生ケース会議

#### 1. 第1回2年次ケース会議（2018年4月18日）

第1回の2年次ケース会議では、初年次ケース会議でC・Dランクに入った学生の対応について教職員で議論を行った。C・Dランクの学生はゼミを申請していない学生が多く、再履修ゼミで主に対応していくことになった。再履修ゼミにおいてカウンセラーの対応とアドバイザとの対応の両ケースでやっていくことを同意した。

#### 2. 第2回2年次ケース会議（2018年6月6日）

第1回のケース会議においてC・D判定がついている学生(8人)について主に議論した。ゼミに来ているかどうかをまずは確認し、その対応を全教職員で確認した。

### 3. 第3回2年次ケース会議（2018年7月4日）

第2回のケース会議の進捗と共に、改善できていない学生の結論を確認した。特にDタイプの学生に対してはセンター職員の対応とし、Cタイプの学生に対してはゼミでの対応と他活動での対応を同時にやっていく施策をすることにした。

### 4. 第4回2年次ケース会議（2018年9月12日）

第3回のケース会議の進捗に対して、春学期の授業結果を進捗として共有する。ここで中退になってしまふ学生が2人いたが、1人は経済的な事情で、もう1人は連絡が取れず中退という形になった。今後、前者のような学生をケアするためにはどうするのかを議論した。

### 5. 第5回2年次ケース会議（2018年10月10日）

第4回にチェックを入れた5人の学生に対して進捗を確認した。

### 6. 第6回2年次ケース会議（2018年12月5日）

第5回にチェックを入れた5人の学生に対して進捗を確認したが、1人の学生が学業不良で中退になった。一方で、これまでCランクの学生だった1人は2年生になってからしっかりと学校に来ており、ゼミにも来られているためBランクにして経過をみていくことにした。

### 7. 第7回2年次ケース会議（2019年2月6日）

第6回にチェックを入れた5人の学生に対して進捗を確認する。Dランクの学生の内、1人は休学になった。この学生は1年生から学校に来られずにいた学生であった。

### 8. 第8回2年次ケース会議（2019年3月13日）

第7回にチェックを入れた5人の学生に対して進捗を確認した。

### 9. 総括

結果として2年次に退学してしまった学生が7人であり、その中でC・Dがついていた学生6人になっている。C・Dがついていた学生で2年次に退学してしまった学生は1年次のころからケアをしているが、うまく通常学生には戻れなかった。これらの学生は教学的なケアをするより、カウンセラーと学生支援センターをどうアドバイザと連携させていくのかが大切になる。

## 就職率向上施策：就職ケース会議の実施

### 日程

2018年7月4日(水)第3回ミニFD・IRワークショップ vol1

2018年9月12日(水)第4回ミニFD・IRワークショップ vol2

2018年10月10日(水)第5回ミニFD・IRワークショップ vol3

2018年12月5日(水)第6回ミニFD・IRワークショップ vol4

2019年2月6日(水)第7回ミニFD・IRワークショップ vol5

2019年3月13日(水)第8回ミニFD・IRワークショップ vol6



## 目的

就職率の向上は学生満足度を上げ、大学全体の改善に結びつくものである。経営経済学部の内定率は94%、ビジネス創造学部は100%だった。実就職率は経営経済学部が78.5%、ビジネス創造学部が90.7%となり、去年の同時期と比べて改善している。

## 経営経済学部

経営経済学部の就職ケースは、キャリア委員会／キャリアセンターと連携して就職支援が必要な学生を絞り、どのような支援をしていくかについて知恵を出し合う場という位置づけで運営した。就職ケース会議では、その時々就職活動状況に応じて、4年次アドバイザーを中心に多岐にわたる情報交換が行われた。

第1回就職ケース会議(2018年7月4日)

就職活動状況に応じて、学生を以下のようにスコアリングした。

A: 内定／内々定がとれている学生(内定／内々定がとれているが、就職活動を継続している学生も含む)

B: 就職を希望し、就職活動を行っている学生(内定／内々定はとれていない)

C: 就職を希望しているが、ほとんど就職活動をしていない学生

F: AからCに該当しない学生(進学、起業、後継、卒業単位優先、帰国などを含む。連絡がとれず状況を把握できない学生を含む)

スコアリングに基づいて学生の現状を大まかに確認した上で意見交換を行った。Cの学生は、留年生または留学生であるという共通項があることが確認された。Bの学生は、順調に就職活動を進めている学生と努力が空回りしている学生に大別されるという意見が出た。後者については「マッチング」に問題がありそうなので、新卒就職斡旋を利用してはどうかという提案があったが、利用にあたっては業者の選別が必要であることが確認された。キャリアセンターからは、就職支援にあたってはアドバイザーからの情報が重要であるという意見があった。

上記のような意見交換を通じて、今後も就職支援が必要な学生層を絞り、どのような支援をしていくかについての知恵を交換していくことが確認された。

2. 第2回就職ケース会議(2018年9月12日)

最初に就職ケース会議の目的と運営方針が以下のように確認された。

### 【目的】

- (1) 学生の就職活動状況をできるだけ正確に把握し、情報共有を行うこと。
- (2) 情報共有をしっかりと行うことで、目まぐるしく変化する就職活動環境下における学生へのアドバイス(支援)のレベルを高めていくこと。

### 【運営方針】

- (1) 学生の就職活動に関する情報を、スプレッドシートに事前に入力する。
- (2) 就職活動に関するGood case／Bad caseを持ち寄り共有することで、我々の知識・経験として蓄積していく。

上記に基づき、卒業年次生のアドバイザーから就職活動に関するGood case/Bad caseを紹介してもらい、共有した。その結果、Good caseに関しては、2年次秋学期から意識づける、4年生に関しては声かけを欠かさないなどの共通点があることがわかった。

### 3. 第3回就職ケース会議（2018年10月10日）

Bにスコアリングされた学生について、個々の学生レベルでの有効な就職支援を探るために、4年次アドバイザーから該当するアドバイジについてアクションプランを紹介してもらった。

### 4. 第4回就職ケース会議（2018年12月5日）

4年次アドバイザーからアドバイジの就職支援に関する以下のような質問があり、それに対するキャリアセンターからの回答とともに、具体的な就職支援策についての情報共有がなされた。

(1) 就職希望で未内定学生にはキャリアセンターに行くように指導している。キャリアカウンセリングは予約をしないと受けられないのか？

回答：現在、キャリアカウンセリングの予約に空きがある状態なので、予約なしでも大丈夫である。また、キャリアカウンセラーがいない曜日でもキャリアセンターに学生を連れてきてくれれば対応できる。

(2) 本人は頑張っているのだが、教員の目から見てどうしても就職できないと思われる学生がいる。どのように対応すればよいか？

回答：キャリアセンターに知らせてほしい。在学中に就職できてなくても卒業後3年未満であれば、キャリアセンターでの就職支援も可能であるため、キャリアセンターを利用するように勧めてほしい。卒業後に本人に合った就職先が見つかり、就職できることもある。

(3) 求人票はキャリアセンターに行かないと閲覧できないのか？

回答：どこから求人が来ているのかは、学ナビから確認できる。在校生ガイダンス等で学生に知らせてはいる。

### 5. 第5回就職ケース会議（2019年2月6日）

学生の状況と就職希望で未内定の学生の展望を共有した。その結果、予想どおりにいけば、内定率が94～95%になるだろうという見通しが立った。

また、4年次アドバイザーから、現在および今後の就職支援に役立つ以下のような質問と、それに対してキャリアセンターおよび学生支援センターからの回答とともに、今後の就職支援策についての情報共有がなされた。

(1) 本学の提携インターンシップ先から嘉悦の学生を採用したいと強い要望がある。

回答：未内定の学生に当該企業を紹介してほしい。

(2) 卒業後も日本で就職活動をする留学生について、ビザの切り換えが必要か？

回答：学生支援センターとキャリアセンターで指導・対応している。

(3) 留学生が卒業延期をした場合、留学ビザはとれるのか？

回答：本学規程では留学生の卒業延期を制限していないが、卒業延期をして就職活動をする場合、ビザ更新で不許可になる可能性もあり得る。更新の際に、なぜ卒業をしなかったのかを弁明する書類が必要になる場合もあるとのことである。

## 6. 第6回就職ケース会議（2019年3月13日）

就職希望の卒業年次生の就職活動状況の最終確認を行った。アドバイザーの指導で卒業ぎりぎり  
で就職が決まった学生が紹介され、諦めずに就職支援をしていくことの大切さが確認された。

## ビジネス創造学部

就職ケース会議では就職・進学が決まっている学生と、就職・進学が決まっていない学生で学生情報を共有し、決まっていない学生の中で就職活動をしている学生としていない学生に分け  
教学施策とその実施方法を共有した。

### 1. 第1回就職ケース会議（2018年7月4日）

第1回就職ケース会議では参加した教職員により4年次学生に対してAからDのラベルをつけた。参加した教職員は4年次のゼミをもっている教員、キャリアセンターの職員である。学生には就職活動の状況に応じて下記のラベルを付けた。

- A: 就職先が決定し就職活動を終了している学生、進学等で進路が決定している学生。
- B: 就職活動を現在継続している学生。内定後でも継続している場合を含む。
- C: 就職活動をやってはいるが、キャリアセンターに行っておらず思うような成果が出ていない学生。就職活動まだ本腰が入っていない状態。
- D: 就職活動をしていない、ほぼやっていない学生。

以上のラベルをつけたあとに、各ゼミ教員から学生の就職活動状況について説明をもらい、C・D学生に対してはキャリアイベントに行くように指導するとともに、キャリアセンターからも学生を誘導してもらった。

### 2. 第2回就職ケース会議（2018年9月12日）

第1回就職ケース会議の時にC、Dになっている学生を中心に学生の就職活動の進捗を確認した。A、Bの学生は内定先と共にどのようなことをしているのかという行動の確認、一方でC・D学生は就職活動ができていない理由を確認した。その結果、C・D学生を一度集めて学部長と教職員で行動を確認することになった。

### 3. 第3回就職ケース会議（2018年10月10日）

第2回就職ケース会議の時の情報に加えて、現在までの進捗を共有した。前回のC・D学生の進捗は特に注意深く行き、現在の単位と共に卒業の可否を含めて確認した。

### 4. 第4回就職ケース会議（2018年12月5日）

第3回就職ケース会議の時の情報に加えて、現在までの進捗を共有した。前回のC・D学生の進捗は特に注意深く行き、現在の単位と共に卒業の可否を含めて確認した。

#### 5. 第5回就職ケース会議（2019年2月6日）

第4回就職ケース会議からの進捗を確認した。卒業中心としていた学生の卒業可否が判別できたところで、その学生に対してのケアを行った。

#### 6. 第5回就職ケース会議（2019年3月13日）

第5回就職ケース会議からの進捗を確認した。卒業中心としていた学生の卒業可否が判別できたところで、その学生に対してのケアを行った。

## 授業評価アンケート

### 概略

春学期の授業評価アンケートは昨年度は春・秋共に50%を超えなかった。授業評価アンケートは授業がしっかり行われているのかの指標であり、アンケートの正確性を上げることから50%の回答率を目標とし、アンケートの回答率向上施策を行ってきた。結果として、今年度は両学期共に50%を超え、アンケートの回答率の向上が見られた。

### 春学期授業評価アンケート

#### 日程

- 【1】授業内事前告知 5月21日(月)～5月25日(金)
- 【2】実施 5月28日(月)～6月1日(金)  
更に、休講・ゼミフォローとして 6月4日(月)～6月15日(金)
- 【3】集計結果閲覧 6月18日(月)～3月29日(金)
- 【4】授業内フィードバック 6月18日(月)～6月22日(金)
- 【5】ファクトブックのスライドと説明でフィードバック

### アンケート概略

春学期のアンケートの回答率は全体で64.01%、経営経済学部は62.00%、ビジネス創造学部は69.63%となった。回答数は延べ人数で6672人であった。

### 秋学期授業評価アンケート

#### 日程

- 【1】授業内事前告知 11月5日(月)～11月9日(金)
- 【2】実施 11月12日(月)～11月16日(金)  
更に、休講・ゼミフォローとして 11月19日(月)～11月30日(金)
- 【3】集計結果閲覧 12月3日(月)～2019年3月29日(金)
- 【4】授業内フィードバック 12月3日(月)～12月7日(金)

## アンケート概略

秋学期のアンケートの回答率は全体で56.94%、経営経済学部は55.23%、ビジネス創造学部は56.94%となった。回答数は延べ人数で5478人であった。

## 評価

春学期・秋学期で授業評価アンケートを行った。目標としていた回答率50%に対して春学期の回答率は64.01%(経営経済学部 62%、ビジネス創造学部 69.63%)、秋学期の回答率は、56.94%(経営経済学部: 55.23%、ビジネス創造学部:62.16%)となった。両学期・両学部ともにアンケート回収率は目標値を超え、ある一定の基礎的データの収集を行うことができた。